

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヴァンサン・ヴォワチュールをめぐる論争
Author(s)	田島, 俊郎
Citation	フランス文学, 24 : 14 - 25
Issue Date	2003-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041054
Right	
Relation	



ヴァンサン・ヴォワチュールをめぐる論争¹⁾

田 島 俊 郎

はじめに

ヴォワチュール (Vincent Voiture) が今読まれないこと、読みようがないことは、どうにか手に入る版が1855年刊行の Ubicini 版の1967年のリプリント版でしかないことから知れる。だが17世紀前半のパリの文学環境をリードしたのはランブイエ邸のサロンであり、ヴォワチュールはその重要人物であったのだから注目してしかるべきだろう。サロンの大きな楽しみは会話であり論争である。そういった論争は口頭で交わされることもあっただろうが、書簡が重要な意見交換の手段でもあった。パスカルなどわれわれは多くの論争のための書簡を持っている。書簡は個人あてであっても個人的なものとは限らなかった。サロンで読み上げられ、あて名人以外にも聞かれ読まれることを想定して書かれた。ヴォワチュールの書簡の末尾に言及され挨拶を送られる人々の名前は、書簡が一对一のメディアではなかったことを示している。口頭であろうと書簡によるにせよ、論争は問題への理解を明確にするための重要な手段である。問題に対して対立する意見を出し合うことによってより高次な理解へとたどり着けるはずだ。もっとも、われわれが日常的に目にする熱心な論争は、相互理解へ向かうのではなく相手の殲滅を目的とするところではあるのだが。17世紀のサロンでも事情は変わらないようだ。

本論は、ヴォワチュールをめぐる交わされた論争を通して、ヴォワチュールという人物の資質、また当時の文学意識を照射しようという試みである。論争を追跡する手がかりになるのはヴォワチュール自身また周辺の人物たちによる書簡である。今回詳細に立ち入るのは、1639年に交わされた、アリオスト (Ariosto) の『取り違え』 (*I suppositi*) の評価をめぐる論争である。この論争自体は文学史の中でも触れられることがないような些末な事件である。しかしシャプラン (Jean Chapelain) とバルザック (Guez de Balzac) が詳しく書き残しているので議論の過程をたどることができる。それらの書簡を通してヴォワチュールや他の論者たちの資質を見ることができよう。シャプランやバルザックは、この論争のつい1年ほど前にパリの文壇を賑わした『ル・シッド』論争でも重要な登場人物であった。『ル・シッド』論争との関わりも考察する。

ヴォワチュールの関わった論争

ヴォワチュールをめぐるのは、時にはヴォワチュール自身が好んで、時にはヴォワチュールが関わる意志もないままに、論争が交わされた。ヴォワチュールが好んで参加した論争には、1632年から33年にかけてのポーレ嬢(Angélique Paulet)やゴドー(Antoine Godeau, dit nain de Princesse Julie)との角逐、1636年のコルビー奪還をめぐる Rond と書簡、1637年の car 論争などがある。またヴォワチュール自身が望まないまま議論に巻き込まれたものとしては1645年前後の Belle matineuse 論争、ヴォワチュールの死後1649年12月のユラニー・ヨブ論争がある。さらに1650年のヴォワチュールの『作品集』刊行に際してはヴォワチュールを擁護する Costar とバルザックとの間に出版合戦が起きる²⁾。

『取り違え』論争

1639年はじめには、ヴォワチュールは『取り違え』の評価をめぐるシャプランに議論を挑まれる。きっかけはその4ヶ月ほど前の1638年9月、ルイ13世とアンヌ・ドートリッシュの間には王太子後のルイ14世が生まれ、ヴォワチュールは王太子の祖母マリー・ド・メディシスの故国フィレンツェに、王太子の誕生を伝える使者として派遣されたことである³⁾。1638年9月末ヴォワチュールがイタリアへ向け出発する際、シャプランは『取り違え』を託して、書評を依頼する。アリオストの『取り違え』は、プラウトゥス(Plautus)の『捕虜』(*Captivi*)を翻案した1509年の喜劇である。1638年にはロトルー(Jean Rotrou)が同じくこの劇を翻案して *Les Captifs* の名で上演しており、それがシャプランたちに百年以上前にイタリア語で書かれた作品に注目させたのだろう。バルザックはアングレーム郊外のバルザックの地に隠栖しており、シャプランはパリの近況を知らせていた。1638年12月5日、シャプランからバルザックにあててこう書き送っている。

ヴォワチュール氏はプラウトゥスの『捕虜』に対応して書かれた『取り違え』と呼ばれる第一作を持って行かれました。手許に戻りましたらすぐに送りましょう。

(Chapelain, p. 331-333. 1638年12月5日付)⁴⁾

1639年1月にヴォワチュールがフィレンツェからローマを経て帰国した際、シャプランはヴォワチュールに『取り違え』評をたずねる。シャプランの期待に反してヴォワチュールの反応は否定的であった。ヴォワチュールの判断に納得しないシャプランは、評価をランブイエ嬢(Julie d'Angennes, Mademoiselle de Rambouillet, dite Princesse Julie)にも委ねる。しかし、ランブイエ嬢の見解もシャプランの期待をさらに裏切り、ヴォワ

チュールに与するものであった。ランブイエ邸の華の判定には従わざるをえず、シャプランは敗訴の代償としてスペイン製の手袋をヴォワチュールに送る。この模様は1639年3月12日付けのシャプランからバルザックあての書簡で報告される。

ヴォワチュール氏がイタリアに行かれる際に、わたしはアリオストの『取り違え』を、暇つぶしとイタリア語に慣れられるようにと貸しました。ローマから戻られた氏は、この作品は大した作品ではないという意見でした。わたしとは意見が食い違いましたので、氏はランブイエ嬢を判定人として求めたのです。この方は言葉が良くおわかりになれないためか、作品を読みながらわたしがその中の卑わいな部分を取り除いたせい、それとも純粋な喜劇の規則はご存知なかったせい、この作品の最初の2幕は気に入らない、とおっしゃいました。われわれはスペイン製の手袋を賭けておりました。翌日さっそくそれを、敗者や断罪されたものとしてではなく、わたしの依頼で（イタリアから）運んできてまだ代金を受け取ろうとはされない何冊かの本の代金として送ったのです。」（Chapelain, p. 401. 1639年3月12日付）

シャプランは判定には納得していない。1639年3月1日付けのヴォワチュールあての書簡では、判定者ランブイエ嬢への敬意は表わしながらも、判定の資質については疑義を表明する。

『取り違え』に対するプリンセスジュリーの判断の前半は公平でも至高のものでもないかもしれず、またあれほどに完璧な人物の意見に対して帰すべき尊敬の念をもってわたしがそれに服属すべきだ、と思っていないような時には、その判断を大いに喜んで受けるというわけには参りません。」

（Chapelain, p. 395-396. 1639年3月1日付）

素人であるランブイエ嬢の判定に納得が行かないシャプランは、文芸の権威であるバルザックに3月4日付けの書簡で判断を委ねる。

ヴォワチュール氏が返してくれた『取り違え』を送ります。この本をよくお読みになり、良かれ悪しかれあなたの忌憚のない意見をいただけますようお願いいたします。

（Chapelain, p. 399. 1639年3月4日付）

バルザックは間髪を入れず1639年3月15日付けの書簡で、シャプランが期待した通り

『取り違え』を好意的に評価する旨伝える。

『取り違え』は兄であるオルランドの名を辱めるようなものではないでしょう。これほど巧妙で、簡潔で、すっきりした作品は見られません。フランスはこのジャンルではこの作品に較べるに価するようなものはまだ見たことがないのです。

(Balzac, p. 786. 1639年3月15日付)

ところで、バルザックにとって、アリオストはもちろん未知の作家ではなかった。またこの劇自体も既知の作品であった。そのことは前年の12月のシャプラン宛の書簡の中で、バルザック自身が言明している。

お話のアリオストの喜劇群については、以前のローマ旅行の際に読んでおります、そして喜んであなたのこれらの劇に対するあなたの好意的な判断に同意するところです。

(Balzac, p. 771. 1638年12月19日付)⁵⁾

とすると、シャプランの問いかけは回答を知った上での問いかけではなかったか。バルザックへの提訴は共通の敵を追いつめるための茶番ではなかったか。判定を承知の上でシャプランは1639年3月20日バルザックあての書簡で自らの論点をこう説明する。すなわち、人間を導いているのは自然 (nature) と技巧 (art) なのだが、自然に従うだけでは完璧の域に到達することはできず、技巧によって自然を導くことによって優れた作品を作り、また批評できるのだ、と。シャプランはヴォワチュールの書簡に言及し、ヴォワチュールとの論点の違いを整理したとしているが、これより前にバルザックの手許に届いたはずのヴォワチュールの書簡はわれわれには残されていない。

多くの人にとっては、自然が統治しているのであって技巧ではないのです。おのおのは自らの天分に従い、それ以外を導師として受け入れはしないものです。というのはそれが一番与し易く寛大なのですから。そして技巧だけが人間の作品を完璧の域に導くのですから、凡庸な精神は至る所にあるのに崇高で優れたそれはほんの少ししかないのです。この点がわたしとヴォワチュール氏とのアリオストの『取り違え』をめぐる争いの論点です。いやむしろこれら二点、つまり規則か個々人の良識のどちらが、芸術作品や喜劇や絵画や建築を批評するのに確実かつ有効に使えるかという問題です。

ヴォワチュール氏が書き、わたしがあなたに送った意見書では氏がいずれの立場

をとるかはおわかりになれなかったかもしれないとしても、わたしが申し上げたことからおわかりになれるでしょう。確かに、学問のあらゆる基礎を揺るがし、あらゆる法規を上訴し、あらゆる時代のあらゆる賢者たちの意見よりも自分自身にしか従わないときには、ものごとは奇妙な段階にあると言えましょう。

(Chapelain, p. 402-403. 1639年3月20日)⁶⁾

書簡が残されていないために、ヴォワチュールとランブイエ嬢の陣営は沈黙、孤立しているように見える。包囲網は徐々に厚くなっていく。3月の後半にはスキュデリー兄妹 (Georges et Madeleine de Scuéry) もシャプラン支援の側に立って論争に参入してくる。シャプランは1639年3月26日付バルザックあて書簡で、バルザックの支持を感謝すると同時に、スキュデリー兄妹の支持も伝えている。

あなたはあらゆる点において、あなたがアリオストの『取り違え』について書き送ってくださったすべてにおいて、わたしと同意見でした。もしあなたが別の風に、つまりあなたがなされるに違いないとヴォワチュール氏が想像したように判断されるようなことがあったら、わたしは非常に驚かされておりましたでしょう。あなたの手紙はわたしに対して非常な名誉をもたらし、土台で支えられていたほどでなくもなかったわたしの判断を引き上げたのです。わたしの党派はわたしを凌駕し神々を迎えたわけです。(中略)でもあなたの手紙が届いたとき、わが党はさらに増強されたのです。「わたしが勝った」と叫ぶものがおりました。そしてマレーのアポロンとカリオペー (スキュデリー兄妹) が彼らの豎琴でわたしの勝利を祝ったのです。お送りする手紙の写しでこの神の名前で誰のことを指しているのかおわかりになるでしょう。」

(Chapelain, p. 405-406. 1639年3月26日付)

シャプランはヴォワチュールのライバルであればパリを離れた人物であっても多数派工作を怠らない。ランブイエ邸で el Re Chiquito (小さな王) とあだ名されたヴォワチュールと、かつて才知の高さと背の低さを争ったゴドー (nain de Princesse Julie) へも1639年4月1日付で状況を説明する。

先週あなたはプリンセス (ジュリー) とわたしから、あの方がわたしと交わされようとしたアリオストの『取り違え』に関する諍いについて知らせが参ったことでしょう。この件についてはわたしの側に理があるということに、あの方のために困惑しておりますが、あの方が介添えとお呼びになり、その実は張本人であるヴォワ

チュール氏に対してはいい気持ちであります。」

(Chapelain, p. 412. 1639年4月1日付)

文人たちの支持を取り付け、ヴォワチュールを孤立させたシャプランは、1639年4月10日付バルザックあての書簡で、論争が公刊される暁には敗者の名前は匿名にするべきでしょう、などと余裕の口調で勝利を宣言する。

(『取り違え』論争の) 公刊にあたって、プリンセスジュリーとヴォワチュール氏の名は星印になるべきです。彼らが公然と凱旋に引きずられる恥辱に苦しまないように、彼らが鞭打たれる必要があるとしたら、秘密裏にのみであるようにです。」

(Chapelain, p. 413. note 1639年4月10日付)

バルザックは自らの公平さ公正さは堅持する。シャプランを支持しつつもその党派的な行動にはそれほど同意できなかったのか、1639年4月15日付シャプランあての書簡の中で、自分の判断は独立したものである旨を宣言している。もっとも、そのヴォワチュール評は多くの場合辛らつで、ヴォワチュールに対して保とうとする公正さはポーズだけかも知れないが。

アリオストの件はいろいろ憶測を生んで党派をなしているようですね。わたしとしてはあなたの側であるかどうかは考慮せずに最良と考えた方に就きますので、あなたはわたしが判断したことについて感謝されるべきではありません。目標としては真実しかありませんし、そのためにはソクラテスやプラトンともたもとを分かち、友人や自分自身の意見とも戦わねばなりません。」

(Balzac, p. 787-788. 1639年4月15日付)

シャプラン一人が騒ぎ立てていた感が否めなくもないので、シャプランが満足すればこの論争熱は終息する。この後ヴォワチュールはもちろん、シャプランも『取り違え』には言及しない。この議論への最後の言及は半年ほど後、バルザックの1639年9月10日付コンラールあての書簡の中でのものである。バルザックは自らも中立公正を宣言し、コンラールの公正さを褒めはするのだが、反ヴォワチュールだったからこそ公正と認め、感謝しているのではないか。

1年以上あなたに手紙を書いていないことをお詫びします。しかしわたしはあな

たがシャプラン氏にお書きになったもので、あたかもわたし自身にお書きいただいているかのように満足しております。(中略) アリオストの『取り違え』の諍いに関してあなたが下されたあの高名な判定の報告は受けました。そしてそこにあなたの公正さ、あなたの巧みさ、あなたの判断力、そしてあなたの精神の繊細さすべてをともに仰ぎ見る謂われを見出します。これほどに学識深く、これほどまでに先入観を持たない判事も、これより公正かつしっかりした判決文も見ることはいまありません。」
(Balzac, p. 798. 1639年9月10日付)

シャプランやバルザックの文からはヴォワチュールが意見を述べた書簡の存在が窺えるが、われわれには『取り違え』に関する記述を含むヴォワチュールの書簡は残されていない。したがってヴォワチュールが畏れ入ったのか、反論したのか、あるいは無視したのかはわからない。

『ル・シッド』論争第二幕

『取り違え』論争の経過はこのようにたどっていきけるのだが、そもそも論争の原動力がどこにあるのかよくわからない。百年以上前のイタリア語の作品の評価をめぐって、これほどの文人たちがなぜこれほど熱中しなければならなかったのか。ヴォワチュールの批評はシャプランの期待通りではなかったかもしれないけれど、それはいつの時代にも日常的にありそうなこと。ましていわんやヴォワチュールとシャプランの資質は、それぞれが書き残したものからは明白に異質なのだから、生身で接していた者同士なら意見が一致しないことくらい予想がつきそうなものではなかったか。なぜ、ヴォワチュール断罪のためにあらゆる役者がそろい、包囲網を形成したのか。田島の推測を二つ述べる。

一つにはヴォワチュールが経済的には成功し、貴人に気に入られていたことへのやっかみがあったのではなかったか。この時代、文人の生活の糧は、献呈された作品への見返りとして有力者から与えられる年金や謝金であった。そんな中でヴォワチュールは作品を自ら世に問うこともなく年金を得、また貴人たちに不思議と気に入られて、フィレンツェへ王太子の誕生を伝える使節に任じられたり、あるいはポーランド王に嫁すヌヴェール公女マリー・ルイーズ (Marie Louise de Gonzague) の随員に任ぜられるなど、義務は少なく役得は多そうな仕事にはありつける。『オルレアンの処女』(La Pucelle) と称する作品を書く約束を先送りしながら年金を食いつなぐシャプランなどには不愉快な存在だったかも知れない。

バルザックはもともとヴォワチュールには批判的である。書簡作家としての地を脅かすヴォワチュールは面白くない存在だったに違いなく敵対的であった。この先1649年の

ユラニー論争でも、1650年以降のヴォワチュールの『作品集』評価をめぐってもヴォワチュールを断罪する側に立つ。この論争より1年ほど前、1637年秋のCarの断罪をめぐるヴォワチュールの書簡について、ヴォワチュールの才知は認めつつ、論の構成がなっていないと批判する。

(ヴォワチュールは) からかいには才能を持っていることは認めます。ただ文体をもう少し純化させることを望みます。彼の書いたものの中では、構成が時にちぐはぐで、ものごとにせよことばにせよいつもしかるべき位置にはないのです。

(Balzac, p. 756. 1637年10月28日付シャプランあて書簡)

さらにもう一つ。論争の中で示される美意識の対立はわれわれに既視感を与えないだろうか。登場人物や議論の内容から『ル・シッド』論争との類似点に気付く。ほぼ2年前からの1年間、1637年を通じて『ル・シッド』論争は文壇の関心事であった。批評は多く、論点も多岐にわたるが、重要な批評として1637年春にスキュデリー兄が発表した『ル・シッドに関する意見』(L'Observation sur Le Cid)と、シャプランを中心に執筆され1637年12月に発表された『ル・シッドに関するアカデミーの意見』(Les Sentiments de l'Académie sur Le Cid)がある。その重要な論点には、演劇の約束事と作家の自由の対立、真実(vrai)と真実らしさ(vraisemblance)の対立の問題がある。アカデミーの『意見』は、半年前にスキュデリーによって火をつけられた論争を沈静化するために書かれたので、スキュデリーの見解と完全に一致するはずはないのだが、真実と真実らしさの対立という論点においては、両者は異口同音の論を展開する。

スキュデリーによると、文芸の中の真実と現実の中の真実は別のものである。『ル・シッド』は現実の真実を題材にすることによって真実らしさという演劇の規則を破ったとする。

(『ル・シッド』が) 演劇の第一の規則を犯したことを証明するのにそれ以上の苦勞は要りません。またわたしが話している規則の中で多分最も重要なものであり、あらゆる制作の基盤となるものは真実らしさだということを、わたしに続いて思い出そうとする人たちにそれを認めていただきたいのです。(中略)この点において『ル・シッド』の作者は誤ったのです。スペインの歴史の中に、この娘が父親を殺した男と結婚したということを見つけた氏は、歴史的な事柄なので真実ではある、だが真実らしくはない、だからこれは完璧な詩の題材ではない、と考えるべきだったので。」

(Corneille, p. 785.)

シャプランたちが発表したアカデミーの意見書では、真実と真実らしさの点においてはスキュデリーの論は修正されずに受け継がれる。

このできごとが真実であることは詩人に好意的に傾き、だからもしそれが想像された題材であった場合よりは大目に見ることができる、ということは認めましょう。しかしあらゆる真実が演劇にとって適切とは限らないこと、そしてこの並外れた罪の真実のように、判事が判決そのものを罪人と一緒に燃やしてしまうような真実もあるのだ、という意見は堅持し続けましょう。公共の福祉のために抹消すべきであるような、あるいは隠し通すことができないのならば極めて異質なものとして認めることで満足しなければならないような、おぞましい真実があるのです。そして詩人が、真実よりも真実らしさを好み、理性には合致しない真実よりも、偽りではあるが理にかなった題材で仕事する権利があるのはこのような組み合わせの際です。

(Corneille, p. 809.)

真実よりも真実らしさが重要であるというスキュデリー＝シャプランの論理は、『取り違い』論争の中でも生きている。『ル・シッド』論争での vrai と vraisemblance の対立は、『取り違い』論争では Nature と Art の対立、bon sens particulier と règles の対立に変調して提示される。

ところで、『ル・シッド』論争の際にヴォワチュールが書いたとされる風刺詩がある。その中でヴォワチュールは、同業者の批判は気にしないように、とコルネイユにエールを送る。

みなが讃えるあの偉大なシッドの詩句

それを聞き、読めばうっとり。

ひとり詩人が規則にそぐわぬと思し召す。

コルネイユよ、そんなやっかみは気にしなさんな

料理が食膳の人たちのお気に召すとき

料理人のお気に召すかは些細なこと。

(cité par Magne, II, p. 68.)⁷⁾

この詩は1650年の『作品集』およびそれに続く版には納められていないのでヴォワチュールの作であるのかどうかは不確かである。また Tallemant des Réaux などにも言及されていないので同時代の人たちにヴォワチュールの作として知られていたのかどうかもわからない。だがシャプランやスキュデリーなどの目に付いていたとしたら彼らの反感

を掻き立てる一因になりえただろう。

シャプランの論によれば、ヴォワチュールは技巧よりも（独善的な）良識に従って書き、判断していた。たとえ興行的に成功しようと、たとえ真実を題材としようと、規則に合致せず真実らしくないと『ル・シッド』がスキュデリーに断罪されたように、才能はあっても技巧を尊重しないと思われかねないヴォワチュールの態度は、文芸という技巧の制度の上で生きるシャプランたちにとっては目障りな存在ではなかったか。『取り違え』論争は、『ル・シッド』論争の第二幕として戦われたのではないか。

結 語

ヴォワチュールをめぐる論争の内、1639年初頭の『取り違え』をめぐる論争を見た。ヴォワチュールの議論が残されていないこともあって、かみ合った議論は見られない。バルザックは公正さを口にするのだが、感情的な多数派による少数派断罪の気配が見えてしまう。シャプランは nature と art のいずれに従って判断し書くべきかという論点を提出し、ヴォワチュールは nature に従うのみで art をないがしろにしていると批判する。ちょうど成功した『ル・シッド』に真実はあるにしても真実らしさの規則には則っていないと批判するように。コルネイユの側に追いやられ批判されたのだから、ヴォワチュールが孤立したことはヴォワチュールにとって恥辱ではないだろう。（2003年1月13日）

注

- 1) 本論は2001年12月1日、就実女子大学（岡山）で開催された日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会での報告に加筆修正したものである。
- 2) 1632年から33年に争いについては、拙論「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」参照。1636年のコルビーの奪還をめぐるリシュリユー礼讃の Rond と書簡については、拙論「ヴォワチュールの Rond 注解」参照。ユラニー論争については、拙論「ユラニー、ヨブ論争について」参照。コスタールとバルザックの争いについては、拙論「ヴォワチュールが語る1638年のイタリア」注4参照。
- 3) 拙論「ヴォワチュールが語る1638年のイタリア」参照。
- 4) 拙訳による。田島の論点にとって重要だと考える場合は注にフランス語原文を添える。
- 5) 1665年刊のバルザックの作品集では1638年5月19日の日付けを与えているが、シャプランの編者 Tamizey de Larroque は、5月ではなく12月の間違いであるとする（Chapelain, p. 332, note 2.）。内容からシャプランの1638年12月5日付の書簡への返答と思われるのでこの判断は正しいだろう。
- 6) 原文は以下の通り。

En la plupart des hommes la nature gouverne et non pas l'art. Chacun suit son génie et ne reçoit son précepteur que luy, pour ce que c'est le plus facile et le plus indulgent, et comme l'art seul est ce qui peut porter les productions humaines à leur perfection, de là vient qu'il y a tant d'esprits médiocres et si peu de sublimes et d'excellens. C'est là à peu près le sujet de la dispute que j'ay avec Mr. de Voiture sur les Supposés de l'Arioste, ou plustost sur la question duquel des deux on se peut servir plus seurement et plus utilement pour juger des ouvrages de l'art, comme Comédies, tableaux, bastimens etc., ou des règles, ou du bon sens particulier.

Quand, par le placet qu'il vous a escrit et que je vous ay envoyé, vous n'auriés pas connu quel party il tient, vous le verriés aisément par ce que je vous viens de dire. Et certes les choses en sont à un estrange terme lorsque l'on esbranle tous les fondemens des sciences, que l'on appelle de toutes les loix et que l'on se défère plus à soy-mesme qu'au sentiment de tous les sages et de tous les siècles.

- 7) Magne は Bibliothèque de l'Arsenal 所蔵の Conrard のマニュスクリ XVIII, p. 329. を出典としている。だが, Ubcini は載せていないし, ヴォワチュールの詩作品を博搜した Henri Lafay も詩集には納めていない。原文は以下の通り。

Les vers de ce grand *Cid* que tout le monde admire
Charment à les entendre et charment à les lire.
Un poète seulement les trouve irréguliers
Corneille, moque toy de sa jalouse envie,
Quand le festin agrée ceux que l'on convie,
Il importe fort peu qu'il plaise aux cuisiniers.

書 誌

Ariosto, Lodovico, *I Suppositi*, Bologna, Arnaldo Forni Editore, 1976. (reprint of the edition of 1705)

Balzac, Jean-Louis Guez de, *Les Œuvres de Monsieur de Balzac divisées en deux tomes*, Paris, Louis Billaine, 1665. 2 vols. (réimpression par Slatkine, 1967.)

Chapelain, Jean, *Lettre de Jean Chapelain*, de l'Académie française, publiées par Ph. Tamizey de Larroque. correspondant de l'Institut et du Ministère de l'Instruction publique. tome premier, septembre 1632-décembre 1640, Paris, Imprimerie

- Nationale, 1880. (réimpression par offset Joseph Floch, 1968.)
- Corneille, *Œuvres complètes I*, textes établis, présentés et annotés par Georges Couton, Paris, Gallimard (Pléiade), 1980.
- Magne, Emile, *Voiture et les origines de l'Hôtel de Rambouillet (1597-1635)*, Paris, Mercure de France, 1911 (2nd édition).
- Magne, Emile, *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930 (Nouvelle édition).
- Tallemant des Réaux, Gédéon, *Les Historiettes*, édition établie et annotée par Antoine Adam, Paris, Gallimard (Pléiade), 1960-1980, 2 vols.
- Voiture, Vincent, *Œuvres de Voiture, lettres et poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Ubicini*, Paris, Charpentier, 1855, 2 vols. (réimpression par Slatkine, 1967.)
- Voiture, Vincent & Costar, Pierre de, *Les entretiens de M. de voiture et M de Costar*, Paris, Augustin Courbé 1655. (réimpression par Slatkine, 1972.)
- Voiture, Vincent, *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, Paris, Librairie Marcel Didier, 1971, 2 vols.
- 田島俊郎「ヴォワチュールのスペイン, アフリカ旅行」, 『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』 第1巻 (1990年3月), 193頁-227頁
- 田島俊郎「ヴォワチュールのロンド注解」, 『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』 第4巻 (1993年3月) 183頁-231頁
- 田島俊郎「ヴォワチュールの見た1638年のイタリア」, 『言語文化研究 徳島大学総合科学部』 第9巻 (2002年2月) 87頁-116頁
- 田島俊郎「ユラニー, ヨブ論争について」, 『言語文化研究 徳島大学総合科学部』 第10巻 (2003年2月) 173頁-206頁